

— 旅があなたをつくり、哲学があなたを導く —
思想と実践が交差する、攻略本型ビジネス書制作

フィロベンチャー

PHILOVENTURE

Philosophy × Adventure

自己哲学可視化 他者の冒険の道標

お問い合わせはこちら

株式会社ナガサワ文具センター

078-321-5632

▶ PHILOVENTURE（フィロベンチャー）正規販売店

株式会社

ナガサワ文具センター

〒650-0033

兵庫県神戸市中央区江戸町93番 栄光ビル7F

▶ PHILOVENTURE（フィロベンチャー）制作事業者

制作：気球のハンモック

代表：小山 祐太

所在地：兵庫県神戸市中央区浪花町56

経堂プラザひょうご内

お電話：080-0808-0279

メール：y.koyama@ballon-hamock.com

連絡請求書発行事業者登録番号：T9810715036239



北極星はブレない

神納 亮二

— 旅があなたをつくり、哲学があなたを導く —
思想と実践が交差する、攻略本型ビジネス書制作

フィロベンチャー

PHILOVENTURE

Philosophy × Adventure

自己哲学可視化 他者の冒険の道標

自分という座標を信じ、世界を観測し続ける働き方の記録

北極星は
ブレない

ふでばこに入りきらなかったのは、僕だった
けれど、本当に窮屈だったのは、
常識のほうかもしれない



株式会社ナガサワ文具センター

法人営業本部 本部長 | 新規事業開発室 室長

かん のう りょう じ
神納 亮二

「常識を疑う、最初的一步」

違和感という羅針盤を片手に、航海が始まる

たとえば、最初にかニを食べたヒトってすごいなって思うんですよ。
初見でかニと遭遇して、食べようって思います？

——タイムマシンに乗れたら、僕はそんな人類の“ファーストベンギン” 達と話してみたい。
誰かがやったから、世界は一步先へ進んだんですね。

「非常識を常識に」と僕はよく言いますが、もっと簡単にありのままで言うなら
「なんで？」なんです。僕は、ずっと「なんで？」と問いながら生きてきました。

義務教育も、働き方も、組織も——当たり前のように当たり前じゃない。
そんな「常識」に、僕の中では違和感が鳴り続けてきたんです。

でも、常識なんて、いくらでもひっくり返る。だからこそ、自分の違和感を無視しない。
それを羅針盤にして、見えない地図を進んできました。

「もしもう一度、人生をやり直せたら？」

そう聞かれたら、僕は学校にも行かず、どこかで働きもせず、ただ“なんで？”を探しながら
生きていたと思います。きっとそれは肩書きのない、名もなき“探究者”です。

僕の旅の理由は「自分に正直でいたい」それだけです。
気づけば、ふでばこに収まらず“境”を超えていた。——それだけのこともかもしれません。

でもね、「常識を常識のままにしておかない」
そう思って動く一人の行動が、やがて誰かの“発射台”になる、そんなことだってあるんです。

非常識を、常識に。
神納 亮二



本書の使い方

社内と社外を越境する、敬愛すべきファーストペンギンへ贈る
あらゆる境界を超えて働くビジネスパーソン必携。キャリア本でも、自己啓発本でもない。揺るがない方向を見定める“羅針盤”

本書制作の背景

越境人材・新規事業開発者の勇気と軌跡を可視化
企業・社会に対して存在意義と可能性を伝える

本書の主人公・神納氏は、老舗文具企業の営業本部長でありながら、自ら会社の枠を超え、スタートアップ支援・地域連携・異業種共創の現場に身を置いている人物です。しかし会社へ所属し社外で働くスタイルは、まだ日本のスタンダードではありません。本書は、その仕事ぶりの“見えづらさ”を“見える化”する試みです。

越境人材・新規事業開発担当者にとって「価値が社内に伝わらない」「社内に理解者がいない」という孤独は、今なお続いています。数字を評価基準に置く、従来の事業と異なる働き方は、未経験者には想像し難いものです。

そんな境界を超えて働く人々の、勇気と軌跡を可視化し企業・社会に対して越境人材の存在意義と可能性を伝えることを目的に本書を設計しています。

越境とは、社会貢献であり、組織変革であり、生き方でもある。そんな読後感を届けます。越境の航路は誰にでも開かれている。神納氏の越境の航路は、その証明であり、その呼びかけです。

対象読者

ファーストペンギンの方々
その働きを支えるマネジメント層の方々

読者像	具体内容
組織内で“越境”しようとする人	新規事業開発/社外連携/異業種交流/副業・複業（パラレルワーク）に挑むビジネスパーソン
越境人材を支えるマネジメント層	人材開発部門/管理職/経営層
組織文化に“違和感”を持っている人	慣習や常識に縛られた働き方に疑問を持つ全ての社会人
自分の哲学やスタンスを言語化したい人	自己理解/パーソナルブランディングを模索する人
これから社会人になる就職活動を控えた学生	漠然とした不安と生きづらさを抱え就職活動が楽しめない人

本書の提供価値

自分ごと化できる構造により
個人と組織をメタ認知

項目	内容
哲学と冒険を接続する構造	「人生=RPG」「働く=航海」と見立てた構造で、自分ごと化
ストーリー×思考×メタ認知	章ごとにエピソード/問いかけ/メタ視点の構造を配置。ビジネス書としての深度と再現性を確保
RPG風ステータス・記録・用語解説	エンタメ性と実用性を両立。読者が“主人公になれる”体験を設計
哲学を武器に変える事例集	「違和感を信じる力」「非常識を常識に変える構造」など、抽象と具体を行き来できる語り口
社会人教育・組織開発ツールとしての価値	企業研修・キャリア支援・チーム開発にも活用可能な“問いかけ”と“構造化”

本書の構成と設計思想

本書は全体を通じ「自己と組織の関係性」「働き方の進化」「哲学としての実践知」を描き出します
研修コンテンツとして活用可能な汎用性を持った、ビジネス思考と哲学的視座を往復可能な構成です

- ・単なるサクセスストーリーや回顧録ではなく「他者が自分ごととして読み解ける思考の航路」を目指しています。
- ・構成は、地上を旅する〈視点編〉と宇宙を探究する〈視座編〉の2部構成。それぞれが異なる視野と深度を持ちステージごとに読者の認識を揺さぶるよう設計しています。

第1部 | 視点編 “違和感の航海記録”

常識・営業・組織の中で起きた出来事をもとに“違和感”から始まる越境のストーリーを描きます。航海で培われた信頼・行動・直感に焦点を当て「非常識」と「常識」を再定義する個人の軌跡を追体験できます。

第2部 | 視座編 —— “思想の観測記録”

自らの人生観・観測者としての自己認識・哲学の解像度を深めるパートです。宇宙という象徴空間に舞台を移し、「個」が「社会」とどう接続できるか、語りと問いにより読者に委ねます。表層的なビジネス論ではなく、「思想」と「構造変容」の接続に挑んでいます。

RPG的ガイドページ群（随所配置）

読者が能動的に読み進める仕掛けに補助ページを配置

ページ	役割
世界観&航海マップ	各章を島・惑星として配置。航路を辿るストーリー地図として機能
ステータス表記	強み・特性・スキルセットを可視化
メタ構造解説	読み手を“観測者”にする導入装置
神納記録	哲学的思考・共創スタンス・人生観が凝縮された金言集

本書が実現したいことのまとめ

3層構造（物語×思考×問いかけ）により
自由な航海を始められる手引書“羅針盤”

- ・「越境人材」という見えづらい存在に輪郭を与える
 - ・一人ひとりの違和感や問いを、哲学として肯定する
 - ・“ふでばこに入りきらなかった”神納氏の冒険が、次の誰かの羅針盤になる
- この企画は、働くすべての人が“自分という星”の位置を観測し、常識に縛られず、自由に航海を始められるように—そんな祈りを込めたビジネス×哲学の融合プロジェクトです。



第1部 | 視点編 “違和感の航海記録”

問いから始まる人生 —— “違和感”こそが羅針盤だった

「なんで？」「どうして？」——
僕の航海は、ずっと“問い”から
始まってきた気がします。

正しいことより、納得できること。
誰かの基準ではなく、自分の基準。

小さいころから、僕は「そう決まってるから」では
納得できないタイプでした。
ルールや常識を疑うのは、反抗でも批判でもなく、
自分が心から信じられる理由を探すための行為。

だから、いまの僕が「非常識を常識に変える」ような
働き方をしているのも、
じつは自然なことなのかもしれません。

組織の中で、「変わったやつ」と思われても気にしない。
誰かに理解されなくても、
意味があると思ったことには向き合う。

人の意見を、否定もしない。
迷いがいいわけではないけれど、
選択肢は常に自分にあると知っているから。

そんな僕の旅は、地図を持たない旅でした。
けれど、手のひらには、ちゃんとコンパスがありました。
その針は、いつも、“違和感”のある方向を指していたのです。

航海の相棒 ▶ Philoventure (フィロベンチャー) 号
■ 正規ルートを外れてこそ真価を発揮する「逆境適応型」
■ 通常航路ではなく、未踏の水域・宇宙域を優先的に探索
■ 寄港地（出会う人・組織）との相互作用が航海記録となる



第1島 | 始まりの島
当たり前がない子ども
P6-P7



- 心配いらん子の、心配ごと
- “この世界、大丈夫か？”
- 成り行き任せの航路図
- “なんで？”が常識を塗り替える

第2島 | 決別の島
航空貨物の中で…
P8-P9



- 世界とつながる「はず」だった場所
- 意味のない正義を感じている人へ
- やりがいなんて、最初から求めてない
- 非常識を、常識にする力



Philoventure (フィロベンチャー) 号 | SPEC

船体構造	多層構造型（内殻＝信頼、外殻＝柔軟性）※社内信頼に支えられたしなやかさ	通信機能	多重チャンネル共通通信システム※言語化されない空気・信頼・熱量も通信できる設計
推進力	違和感駆動エンジン※常識に対する疑問を原動力に前進	司令室	内部観測室（自己メタ認知AI搭載）※常に「自分という宇宙」を観測しながら航行する設計
動力源	“問い”を燃料にした哲学炉 ※WHYを問い続ける姿勢が動力になる	クルー	役割分担なき同乗者型（信頼ベースの自律型チーム）
操縦方式	羅針盤航法（感知型直感ナビ）※違和感・人との共鳴を指標に道路を選ぶ	拡張機能	宇宙エレベータードッキング※社内外を繋ぐ越境装置。出入り自由なプラットフォーム型船体
服装制限	なし（自由服装制度）※形式より関係性と信念を重視する運用思想	浮力調整	“永白”調整式バランサー※スケジュールや思考に「永白」がなければ浮かない設計

第3島 | 確信の島
数字を支配する僕
P10-P11



- 空気を読んで、数字を動かす
- 関係性が先、数字はあと
- 支配されるな、支配せよ
- 営業は、縁を結ぶ儀式

第4島 | 濁感の島
第3の感覚の芽生え
P12-P13



- やったことない話に、うなずけない
- 予定調和なんて、通用しない
- 味のしないガムはいらない
- “納得感”より深い感覚

第5島 | 提案の島
ゼロイチの実績
P14-P15



- 知る旅を終えて、営業航路へ帰還
- “数字を作る”以外の働き方
- 「声が聞かない海域」から次の島へ
- 自ら帆を張る者の、初めての悔い

第6島 | 老舗の島
例え非常識だとしても
P16-P17



- 常識のど真ん中へ
- “文具”の外側へ、会社の内側へ
- 往出しの“老舗”が強くなる
- “違和感”を道具に変えて



第1島 | 始まりの島
当たり前がない子ども子どもの頃から
“なんで？”が
僕を離さなかった常識への違和感という
コンパスを手に、僕の航海は始まった

心配いらん子の、心配ごと

親は僕に何も言わなかったけど
僕の中では“違和感”が膨らんでいた

自分で言うのもなんですが、ずる賢く要領が良かったです。「無駄なことをしない」が信条で、たとえば宿題もきちんとやる。なぜなら、きちんとしないで親から怒られている兄を見ているから。親にも「この子に関しては心配いらん」と思われていたようで、宿題も進路も確認されませんでした。テスト問題は制作者の意図は何だろうとよく想像して解答し、勉強もそれなりにできましたね。

今思えばその頃から社会の「当たり前」へ感度が高かったと言えるかも知れません。同時に、その「当たり前」に違和感を感じ“なんでなん？”と思い続けていました。



“この世界、大丈夫か？”

働くことも数字の意味も
正直ずっと腑に落ちていない

幼い頃の夢は宇宙飛行士。小学生ではサッカー選手。でも中学・高校になると何かになりたい、特定の職業に就きたいと思うことが一切なくなりました。社会課題を解決したいとか、自己実現したい欲求もありません。他人が見ると、すごく冷めた印象だと思います。以後「何かになりたい」と思ったことは、今もありません。「働くって何やねん」「なんで数字で評価されなあかんねん」「お金ってそんなに大事か？」みたいな気持ちに常にありました。数字に支配される社会に疑問を抱いていたんですね。

成り行き任せの航路図

「こだわりがない」自然で正直な選択で
僕だけの船を漕ぎ出す

僕は高校も進学も仕事も、すべてが成り行き。高校は「仲良い友達とサッカー続けたいしここでええか」みたいな理由で決めたし、専門学校も「外国の常識ってどんなやろ？」と思って通っただけです。高校生の時からずっと水商売は続けていて、生活のリズムも人とは違ってました。

専門学校時代は、夜の水商売終わりにそのままグアム行って、月曜の朝に帰ってくる、みたいな生活。行き先がグアムなもの、便の時間がちょうど良いから。「できるからやる」そんな流れで生きてました。

“なんで？”が常識を塗り替える

小さな違和感が
僕の人生の地図になった

白タイツが嫌だったんです。キリスト教系の幼稚園で、男女関係なく冬はみんな白タイツを履いてたけど、僕だけはどうしても履きたくなかった。「寒いから履きなさい」と言われても、「寒くない」と言い張ってました。寒いけど寒くないと言う。先生に「外で立っときなさい」と怒られて「外のほうが風邪ひくで」と返すと、次は「じゃあ中で立っときなさい」に変わった。そのやりとりが今でも不思議と覚えてるんです。理由のない常識って、何？という違和感の芽生えですね。

中学2年生のときの合唱コンクールでは、声変わりのせいで歌えなかった僕に、担任の先生が「指揮者をやりなさい」と言ってくれました。普通は全学年全クラスで先生が指揮をしていました。でもうちのクラスだけ、生徒が指揮者。結果、優勝しました。先生は泣いて喜んで、僕も「先生も常識を破ってくれたから優勝できたんやで！おめでとう！ありがとう！」と伝えたら、また号泣。

今思えば、幼少期から“違和感”に敏感に反応していたし、何に“違和感”を感じるのかははっきり分かったのが、合唱コンクールでした。常識・非常識、誰が決めたん？どんな経緯・理由があるの？自分の“なんで？”に応えられるものが無ければ、そんなしがらみは要らない。そう確信しました。枠を再定義する自分。ずっと「なんで？」という感覚だけは、僕を離さなかった。そしてそれは、この後の人生でも、進むべき方向を指すコンパスになります。決められた場所に収まらない、世界の探究が始まりました。

りょじ Lv: 14 常識崩し見習い | 「なんで？」という問いが生き方を選び始めた頃



PHILO VENTURE POWER: 哲学習得力

000003200

まだ実践経験は乏しいものの、“おかしい”をやり過ごさず、違和感を大切にする若き探究者。社会という地図を前にしながら既製ルートではなく“問い”を羅針盤に道路を模索しはじめた。

99	問いの火力: 探究・動
99	北極星性: 観察・静
20	共通語能力: 対話・共鳴
10	異文化対応力
10	金目マネジメント: 信頼・静寂
10	発射台建設スキル: 他者支援・導き

そうび

手探りの万年筆
違和感を“言葉”に変えるが、まだ筆は定まらない
学生服
社会に合わせてはいたが「なんで？」の音が騒いでた
中身スカスカなカバン
知識も答えも問い直すからこそ何でも入る
“なんで？”コンパス
誰も気づかないズレに反応。進む方向は「疑問の先」

かくとくしょうごう

違和感検知章
違和感検知章
“白タイツ拒否”の違和感を自然検知できる生徒のスキル
常識懷疑章
常識懷疑章
既存ルールを見直す目を持つようになる

常識への違和感こそ、社会との“接点”
気づかないうちは、まだ“枠の中”

今も“違和感”を感じたら
まず“3回理由を聞く”
理由がなければ「そのルール、いらん」



“なんで？” という問いは、 実社会でも通用するか

常識のルールに挑んだそのとき、
僕のコンパスはぶれなかった

世界とつながる「はず」だった場所

貨物の通関はできても
自分の“気持ち”は通関できなかった

地理や国旗に昔から関心があり、自然と「国をまたぐ物流」に惹かれていました。旅行業の専門学校へ進学。覚えた知識を活かせればと考え、自然と「国をまたぐ物流」に惹かれます。卒業後は旅行会社ではなく、あえて添乗員以外の道を選び、航空貨物の税関業務へ就労。好きだった“世界と繋がる知識”が活かせると思いましたが、実際の業務は淡々とした荷物のチェック。「マジで面白くなかった」仕事に理想も抱いていなかったのも、その感情は受け入れました。創造性は感じられず、倉庫での仕事に“自分の存在意義”はありませんでした。



意味のない正義を感じている人へ

決まりごとに従う前に、
“なんで？”を聞ける自分でいたい

決定的だったのは、倉庫掃除の仕方をめぐる先輩との衝突でした。部屋の奥から出口に向けて掃除する、という効率的なやり方を提案するも「決まりやから」「何でか知らんけど、そうやから」という理由にならない返答に納得できませんでした。

3回理由を聞いて答えられないなら、そのルールは捨てた方がいい——これは僕の行動原理のひとつ。思考停止のルールに固執する人間に対して、強烈な違和感を抱き「ここでは自分の存在に意味がない」と感じて退職を決意。半年でこの職場を離れました。

やりがいなんて、最初から求めてない

期待しない、だから迷わない
“意味のある我慢”しかしたくない

そもそも仕事にやりがいとか、夢が叶うとか、そんな幻想は持っていません。だから「面白くない」と感じても落胆はなく「やっぱりそうか」くらいの温度感。

どんな仕事であれ、意味があれば続けるし、違和感が解消できなければ辞める。それだけのことです。水商売を通して“我慢の必要性”は理解していましたが、それでも自分の主義に反する環境に自分を捧げることはできません。会社にも「いてくれて良かった」と思われる働き方がしたい。意味のない我慢や違和感を手放すことが僕にとっての“次へ進む磁力”です。

非常識を、常識にする力

“問うこと”から、
僕の社会航路が始まった

決別の島での経験は、僕にとって「常識」と対峙し、「決別」した体験でした。僕以外の人が何気なく従っていた「社会のルール」が、実は誰も理由を語れない、慣性で継がれただけの“しきたり”に過ぎない。そんなとき、「問う」ことすら嫌たがれるなら、僕は次の航路を目指すしかありません。高校生時代から続けている水商売。僕はホスト、パブ、バー、それぞれの場所に応じて役割・関わりを変えました。それは「必要なこと」だったからです。

掃除の仕方にすら理由がない。ならば、もっと大きな制度や慣習はどうなのか？ 誰かが決めた「型」に合わせることが働くことなのか？ その問いは、次の職場でも、どんな仕事にも、僕が持ち続ける“思考の通関検査”になりました。大多数の人は、疑問を持ちながらも「我慢する方が大人だ」と思い込んでいます。でも僕は、納得できないことに自分を合わせたくはありませんでした。

もし理由のあるルールであれば、議論ができます。僕も自分の意見を押し通したい訳ではありません。でも理由を聞かれたときに「あわわ…」と言葉に詰まる人が強制するルールに、未来はないです。

この島は、僕にとって学校から社会への“越境”です。そして、実社会における“非常識を常識に変える検証”の第一歩でした。ここで得たのは、「従うこと」ではなく、「問うこと」への自信です。

りょじ Lv: 20 規則の国境に立つ質問者 | 疑問で海を割る青年



PHILO VENTURE POWER: 哲学習得力

000005400
+2300

社会のルールを“糖呑みにしない”姿勢が芽生えた時期。疑問を持つだけでなく、それを言語化し、対話に持ち込む術を学びはじめる。「従うこと」と「納得すること」の境界を見極める観察者。

	120	問いの火力: 探究・動 +21
	120	北極星性: 観察・静 +21
	30	共創知力: 対話・共鳴 +10
	40	越境耐性: 異文化対応力 +20
	10	余白マネジメント: 傍聴・静寂
	10	発射台建設スキル: 他者支援・導き

そうび

半熟インクの万年筆
問いのにじみが“違和感の地図”を描き出す
配属シャツ（似合っていない）
業界慣習に「思考停止では染まらない」が誇り
書類カバン
通関資料で塞ぐむが、その中に自分の答えはなかった
3回ルール式コンパス
謎の当たり前に反応し、持ち主にルール確認を迫る

かくとくしょうごう

境界感知レーダー
境界感知レーダー
“納得できないズレ”を高精度で感知できる観察スキル
規則読解力
規則読解力
常識を“読み解く対象”として捉え直す視点

「決まりやから」で片づけられたとき、
身も心もすぐに離岸した

僕の“なんで？”を
僕が軽んじてはいけない



売らないことで 売れていた “営業”という航路

「売る」のではない。“関係性”の風に
帆をゆだね、心をほどく旅

空気を読んで、数字を動かす

会話の先に、
気配とタイミングはやってくる

初めての法人営業に入って「やっぱりな」と思いました。売ってるのはOA機器、でも僕がやってたのは“人との会話”でした。数字や機能じゃなく、どんな人で、どんな空気で、今どんなタイミングか——そこを読むのが仕事。水商売で培った“コミュニケーション力”がそのまま営業でも活かしました。会う時間の中「この社長、そろそろ替えそう」と感じたとき「どうですか」と軽く伝えるだけ。「阪神勝ったし替えよか」って話が動く。製品の知識よりも「空気の交差点」を読むセンサーこそ、自分の武器なんだと思います。まあ、景気が良かった時期ということもありですけどね（笑）。



関係性が先、数字はあと

僕の営業の流儀
“お願い”が届く距離のつくり方

僕は「売りたい」と思って売りに行ったことがないんです。ガツガツ来る営業って、誰でもしんどいでしょ？だから僕はただ喋りに行くだけ。そうすると「そろそろ替えたいねん」と言ってもらえる。機能の説明もほとんどしません。関係性づくりが、何よりも効いてくる。数字が欲しいときは「今月ちょっと厳しいんすよ」って正直にお願いする。関係性ができてるから、成立する。営業って“売ること”より“繋がること”なんやなって、ずっと思ってやってきました。

支配されるな、支配せよ

数字は、追うものじゃない
未達ゼロを設計する主体性が俯瞰的視座を作る

多くの営業マンは数字に追われます。でも僕は、数字を“支配するもの”だと思ってます。例えば自分の売上を作れたら、部署の売り上げを補填し、残りは翌月に繰り越す。ノルマ達成維持のために導入時期の調整をお願いすることもある。数字を「作る」「貯めておく」「動かす」「割る」ことができれば、自分も部署も助けられる。だから、一度も未達成はなかったし、数字のことで怒られたこともない。僕は、自分の数字も、時間の使い方も、“コントロールする側”でいたいんです。それが働く上での快適さ、余白に直結してると思っています。

営業は、縁を結ぶ儀式

数字に現れない
“ご縁の温度”を育てる。

「たくさん売れた」数字より、意外なタイミングで「この人から買いたい」と思ってもらう方が、僕にはよっぽど価値がありました。売り上げや販売台数を競うコンテストでNo.1になることもありましたが、正直、タイトル獲得にはあまり心が動きませんでした。

営業って、数字を追いかけるだけの勝負じゃない。一緒に過ごす時間の中で、じわっと育っていく関係性。売れるかどうかより、思い出してもらえるかどうか——僕の営業の芯は、ずっとそこにありました。

だから僕は「売りに行く」んじゃなく「繋がりに行く」んです。そして、タイミングが合えば“お願い”することもあるけど、全部が人との距離感の中にあるもの。商品より人、数字より空気。今でも「あの人面白いよね」と話題にしてもらえるような営業でありたいし、そういうところから「そういえば、神納さんのところってさ…」と仕事が繋がります。

僕が繋がっていたからこそ来る話がある。それは数字に出たり出なかったり。でも僕の価値観では何よりも嬉しいことです。営業って「買ってもらう」ことより「忘れられない存在でいる」ことなんです。たまたまその人が買い替えようと思ったときに、僕が浮かべばいい。それは偶然のように思えて、実は偶然ではない。

売らないことで売っていた“僕の営業”スタイルって、そういうことだし、僕流の売り上げ設計って、そこが根幹だと思いますね。

りょじ Lv:27 数字を掌握するセールスチャンピオン | 営業王者の栄光航路



そうび

実績記録の万年筆
行動と評価は、すべて“数字”で記録した
勝者のスーツ
営業成績全国一位に相応しい、実業ある数字の勝負服
ハワイ土産バッグ
中身は人との関係が育んだエピソード
“思い出され力”コンパス
買わせる営業より、思い出される営業が軌跡を決める

かくとくしょうごう

水商売最強活用術
商品が売らない。記憶に残る、繋がりで信頼が積み重なる

空気操縦士
商談の流を読み、訪問タイミングを的確に押さえる

結局“売る”って感覚よりも
“繋がる”って感覚で動いた方が、数字は作れる

これは僕の中で、もう答え出てます
“売りに行かない”から“売れる”



“知ってるふり”で 通り過ぎたくなかった 経験の地図の余白

自分の言葉に裏打ちがないまま
会話は上手くやれている…その感覚が嫌

やったことない話に、うなずけない

肩書や出世ルートは必要ない
「知ってる」と納得したいから、僕は現場に立つ

なんとも僕らしい理由なのですが、前職を辞めた理由は営業先の社長との会話の積み重ね。自分の知らない業界や業界の話題に何となく会話は含ませるものの「とはいえ、やったことないもん知らんしな」と自分へ違和感が発動。「知りたい、活かしたい」と思うようになりました。

在庫管理や受発注、アルバイトのマネジメント——営業とは異なる“現場運営”の知識を得るために、カラオケ店舗での勤務を選びました。最初から「店長になったら辞める」と決めて入社したのは、その現場を“学ぶ場所”だと位置づけていたからです。



予定調和なんて、通用しない

今日もマニュアル外の日が始まる
清濁まるごと呑み込めるか、試される度量

カラオケ店勤務では、オープニングスタッフとして、立ち上げも経験し、3店舗を渡り歩きました。日々の店舗運営は予想以上に苛烈で、僕の常識・非常識を揺らすマニュアルでは対応できない現実が押し寄せました。

スタッフ同士の相性、采配、緊急対応…「空間を買ってもらう商売」の現場には、清濁入り交じる“社会の生々しさ”がありました。店長を経験し退職しましたが今もカラオケに行く際は、あの頃のしんどさを思い出し店員の方へ敬意を持っています。

味のしないガムはいらない

“次の味”を求めて越境する
僕の判断軸はいつもそこ

水商売やOA機器営業といった経験を積んだ後で、全く新しい業界に飛び込む。それは「自分のアセットを活かす」よりも「自分の知らない世界を知る」ことを優先した選択でした。過去の経験で培った自信を武器にせず、「味がなくなったガムは捨て、次の味を試す」ように自分の関心や違和感に正直であらうとしました。そこで得た経験・知識・葛藤が、自分を“誰とでも話せる土俵”に立たせてくれています。

この現場運営の経験を直接活かす場面がなくても、僕には血肉となっています。

“納得感”より深い感覚

白黒つけない、つけれない。
葛藤したままの自分でいられる環境

このカラオケ店舗での経験は、「話を合わせるだけでは納得できない自分」に気づいた僕が、自分の足でまいた島でした。客観的に見ると、あり得ない、キャリアの方針転換ですが、僕には必然でした。

多くの営業マンにとって、営業先の社長たちとの会話のなかで、自分が未経験の「現場運営」の話題がたびたび登場するでしょう。本心では分からない。でも上辺の共感・同調をする。僕はその相槌を打つ自分に違和感を感じて、「これは一度、自分が経験しないと」と思いました。名声や称賛に価値を置いていない僕らしい選択ですね。

最初から「店長になったら辞める」と決めていました。越境の目的が「今後の営業のために現場運営を知ること」だからです。実際にカラオケ店で働くと、店舗運営に清濁入り混じる現実があり、衝撃の連続でした。正論では測れないことばかり。けれど、その混沌とした現場こそ、僕が営業先で見逃してきた“空白”の一画だと気づきました。

店舗を運営してみないと分からない気づき。倫理や常識の枠で語れないものに直面し、許容するのか、しないのか。毎日がその判断の連続です。単なる「常識」「非常識」という二項対立では捉えきれない、混沌や矛盾、未定義の領域に触れるものでした。

言うなれば“濁感（だくかん）”常識でも非常識でもなく“濁ったままそこにある現実”。判断を保留する感覚。白黒をつけないグレーの中に立つ。この島で得るつもりだった“未経験”と“経験”の差を埋めた“納得感”の獲得以上に“濁感”にこそ、この島の学びがあります。

りょじ Lv: 28 現場没入マネージャー | あいまいでいる強さを知ったの現場航路



PHILO VENTURE POWER: 哲学冒險力

000195800
+127000

店舗立上げ・運営・採用などの現場マネジメントと共に現場の混沌を知る。数字や制度の外にある“人のリアル”と向き合った。ゴールを決め得られるものを貪欲に吸収した“淡い”の視点を持つ。



そうび

- 音をにじませる万年筆
書くことは空気に紛れ、数字で表せない声を拾う
- 店長のシャツ
動きやすいが責任は重い。心の温度がにじむ一枚
- 実践知の手作りバッグ
既存のルールブックを応用して作ったハンドメイド
- 【淡い対応】グレーゾーンコンパス
白でも黒でもない領域を突き進む、現場特化型羅針盤

かくとくしょうごう

- 淡いの呼吸
制度と実態の隙間を身ひとつで泳ぎ切る
- 混沌耐性
何が起ころうとブレずに現場を包む能力

問いをすぐに答えに変えず、濁りの中にも輪郭を探す
この島で学んだのは、“区切れないもの”と共にいる術

常識でも非常識でもない、
“濁感”のなかで立ち止まる視点を得る



自分のアセットを束ね 誰も描かなかった 航路をひらいた

地図の余白に描き足すように、
提案は動き、形になり、やがて島になる

知る旅を終えて、営業航路へ帰還

知識も体験も違和感も、
営業の地図を描き直す起点になる

カラオケ店勤務を経て、再び営業職に戻ろうと決めたのは「知らなかったことを知る」修行を終えたからです。最初から「店長になったら辞める」と決めていたこの経験を経て、今度は文具業界へ。ナガサワ文具センターと同業種の会社で、4~5年働きました。

小売店舗に加えて、卸・法人営業にも力を入れており、僕はBtoB部門に配属。営業としての再スタートでした。店舗運営経験を直接活用する場面はありませんでしたが元々OA機器の知識があったので、医療福祉分野に特化したシステム導入提案などで成果をあげました。



“数字を作る”以外の働き方

形になった提案、届かなかった場所
新たな経験と背中に残る後悔

営業部門の責任者として、僕は文具販売にとどまらず医療福祉事業部の立ち上げを提案しました。電子カルテやIT機器の導入支援は非常に好評で、千葉へ営業所進出も決定。アイデアが形になり、現場が動き出す嬉しさがありませんでした。しかし、千葉の営業所には十分なサポート体制が整わず、拠点は閉鎖されました。結果的に「放置してしまった」と感じ、その事実は自分の中に引っかかりとして残っています。

それでも部門や拠点を立ち上げた経験は、数字を作ることとは全く違う働き方ができた成功体験です。

「声が届かない海域」から次の島へ

現場を置き去りにする風は
僕の帆を動かさない

営業責任者に就任し社長との関係も良好でした。自分の考えを社長とディスカッションし、仕事を考え、結果を出し、を繰り返していました。

しかし、外部コンサルの導入を機に会社の方針が変化し、自分の意見の押し合わせに難しさを感じるようになりました。「現場を知らない人の理屈で物事が決まる」ことへの違和感。これまでのキャリアでもたびたび感じてきた感覚が再び浮かび上がり、自分の存在意義が希薄に感じられるようになりました。その結果「もうここにいる意味はない」と判断し、退職しました。

自ら帆を張る者の、初めての悔い

“できる”から“やる”へのシフト
初めての後悔はあれど、航海は続く

この4社目では、経験と知識が重なり始め「できること」への意識から、やるべきことが既存になれば「イチから作る」意識が変わっていった感覚がありました。

過去の職場でも違和感の解消へ努めてきましたが、ここでは「提案して、形にして、成果が出た」手応えを得た場所です。会社の既存事業ではなく、自分の意思と動きで、会社へ貢献できた体験です。

だからこそ、千葉の営業所を開設し、なかなかサポートができず結果的に閉鎖に至ったときの“申し訳なさ”は、初めて感じた“自責の念”だったかもしれません。

ただ、この島で痛感したのは「信頼」の定義です。信頼の関係性は、実績だけで築けるものではありません。ディスカッションによって“互いに風を読み、航路を測定し、帆を張り、漕ぎ出す”過程があってこそ成立します。それができない場所に、自分がいる意味はありません。

現場の肌感覚を踏まえた事業の進め方、つまり違和感を解消しながら仕事ができれば、僕も会社にも意味のある貢献ができます。

ですが、現場の空気感を考慮しない“コンサル的理屈”に組織の意思決定が優先されていく中で「このままでは良くない方向へ進む」という違和感の先の危機感を抱きました。それが僕にとっての“この場所を離れる理由”になったんです。このとき、友人の誘いで雑貨卸の航路へ進むことにしました。

りょじ Lv: 33 戦略創出アーキテクト | 自分と組織の航路へ島を書き足す設計士



PHILO VENTURE POWER: 哲学習得力

002475000
+2279300

自らの資質・直感、これまでの経験を基に動く
既存の営業フローに収まらなくなってきた。組織に
新しい問いを投げかけ個人発のアイデアで組織
の価値と実需を最大化させる航海士と設計士。



そうび

極限の万年筆
点在するニーズを線に変え、仮説を言葉にする
高機動型スーツ
正真正正も経路からの接近も可能にする柔軟なスーツ
アセット集約提案カバン
羅針盤と経験を配合し、ゼロイチが入っているカバン
航路創出コンパス
地図にない航路も「ここに可能性がある」と指し示す

かくとくしょうごう

創出シフト
営業を「渡す役割」から「創る役割」へシフトさせる
再定義&運用
「課題を解く」攻めを、現場から着実に実現した着き原動力

会社の既存の枠ではなく、自分のコンパスに従って動いた
提案、実行、成果と後悔。それは余白に島を描き足すこと

“できること”を越えて
“やるべきこと”を探し始めた。



第6島 | 老舗の島
例え非常識だとしても僕の違和感は、
もう行動ではなく
設計思想になる老舗企業では“異物”である自分が
組織の構造・事業を問い直し設計する

常識のど真ん中へ

一度見送った老舗の島へ、逆風の入島
伝統・安定に吹き込む“外風”としての覚悟5社目では、友人の雑貨卸の店に進みました。けれど、
話と実態のズレに違和感を覚え、自分である必要を感じ
ず、すぐに退職。短い航路でしたが、選んだ道にこだわ
らず軌道修正しました。若干の後ろめたさを感じながらも、ナガサフ文具センタ
ーへ。「一度紹介があった会社」だからこそ、自分の意志
と責任を背き会社に貢献したい覚悟がより強まりました。
もちろん逆風、マイナスからのスタート。色眼鏡で見られ
ながら、初日から一人で営業。でも、これまでの経験から
「やれるだろう」という自分への信頼はありました。

“文具”の外側へ、会社の内側へ

他人の家の匂いを突破口に、
入社すぐに社名に異議を唱える新参の僕入社直後から「違和感」が目につきました。社内では
法人営業部門の存在感が薄く、店舗部門ばかりが目さ
れる。でも、法人営業の売り上げは会社でも非常に大き
なウェイトでした。「他人の家に入ったときの匂いみた
い」と感じ「良くない」と直感。入社後すぐに「社名か
ら“文具”を外してほしい」と社長に直談判しました。
入社3年で創業130周年の取り組みにも関わり「ナガサ
フスピリット13憲章」をチームで策定。「組織の根幹」
に関わることで、表面的な違和感の改善ではなく、組織
の土台から刷新する視点が、更に深まりました。

後出しの“老舗”が効くとき

信頼と先入観、その逆転のマーケティング
「文具感」なき入り口設計でバイアスを味方に社名変更は叶いませんでしたが、代わりに「文具感を
外した」Webサイトを2つ立ち上げました。「オフィスレ
イアウト神戸」や「オリジナルグッズ制作.com」は文具
という言葉を外した入り口から集客し、最後に「実はナ
ガサフ文具センターが運営している」と気づかせる設
計。「社名が最初に来るとバイアス。後で来れば安心」
という逆転の発想。老舗の信頼性を活かしつつ入り口を増やす、この取り
組みは、法人営業の柱へと育っています。押し通すので
はなく、可能性を探る姿勢で違和感を昇華させました。

“違和感”を道具に変えて

「とんでもないやつ」の
組織文化のチューニングついに辿り着いたこの島。僕の中の“越境原理”が明確
に形を成し始めました。1社目から一貫して「意味のない
ルール」や「表層的な常識」に違和感を感じてきました
が6社目では、その違和感を“事業設計”という実務に昇華
できました。自分の信念を伝え、反論されても「ではこの
角度ではどうか？」と諦めず提案し続ける姿勢。社名に言
及した件も「保身より、会社の未来を考えての発言」を常
に貫いている一つの例です。僕がこの島で得たのは“組織文化のチューニング”に挑
む力。いわば伝統の島のリノベーション・未来の建設。そ
こに携わってきました。会社へ貢献するために覚悟を持っ
て自分の思想を実践してきました。今は僕を信頼してくれ
ている社長も、はじめはとんでもないやつが来た、と思っ
たことでしょう。でも、縮こまっていたは、僕の価値提供
はできない。だから3回ルールに則り常識を見直し続けて
います。現在の責任者に業務を引き継いだ現在の僕は、島に所属
してはいるが、島にはいません。「無限の海、宇宙」に
います。伝統の島に停泊中の僕の船は、必然性から「宇宙
船」に。島は宇宙船の発射台・着陸地点に変わりました。これまで、常識の地図を片手に、違和感というコンバ
スを頼りに、社会という大海原を航海してきました。けれ
ど、次に向かう場所には、もう地図は存在しません。海図
をなぞる旅ではなく、自分自身が“座標”を発見し“重
力”を定義する旅が始まろうとしています。それはなぜ
か。理由は第2部 | 視点編にてお伝えします。

りょじ Lv: 50 伝統を守る非常識提唱者 | 常識の枠外から貢献する規格外の航海士



PHILO VENTURE POWER: 哲学冒険力

006218000

+2279200

ナガサフ文具センターの
変革期に現れた非常識提
唱者。伝統を守るために
変えることをためらわな
い。それはブレない北極
星。次第に社外から社内
を支えることが自分の使
命であることに気づく。

そうび

共創起案の万年筆
文具という枠を飛び越え、越境を提案に変える

スタンダード破りTシャツ
スーツを脱ぎ、営業する、初のスタイル

会社⇄社会接続バッグ
社会と交信する一歩が詰め込まれた多機能バッグ

“社外起点”コンパス
動き出すきっかけは内より外。外部視点の新標準

かくとくしょうごう

越境船長
社内外の航路を自在に操る
次世代の羅針盤持ち

非常識鍛冶
古びたルールを再創造し、文
化を再定義する火花の持ち主

会社という既存の大地に、問いの杭を打ち、風を読み、帆を張る航海士
気づけば、社会という“重力”すら見直す、観測者の視点を持っていた「地図を書く側」になった僕。
次の海には、もう“陸”はないかもしれない。
それでも、向かう。僕だけの“宇宙圏”へ

完 第1部 | 視点編 航海の果てに

常識の海図を閉じ、北極星を見上げ“未知”を観測する旅へ

第1部時代の僕は
ほとんど“のっぺらぼう”みたいなもんです。

なぜなら、
就職以降の僕は
自分で考えて自分で決断しているわけではないからです。

だからなのか、
子どものころの写真はありますが、
以後の写真も残っていません。

でも、
ナガサワ文具センターに勤め始めて以後は
子どもの頃へ回帰するように
再度人生の舵を自分で取り、
常識という海図と違和感のコンパスを
自分だけではなく会社と重ね合わせて航海を続けました。



「視座」という宇宙へ

この先に向かう僕に、もはや海図はいらない。僕自身が“座標”となり“観測者”となって、これから出会う全ての星の名前を、自ら描いていく。次に向かうのは「視座」という宇宙。そこにあるのは、重力も、地図も、常識もない空間だ。けれど僕は迷わない。なぜなら、自分という北極星を見失っていないから。

第1部で描いてきたのは「常識」に違和感を抱いた私が、組織の中で常識の再定義を起こし、内なる信念を支えに行動を重ねてきた航海の記録でした。

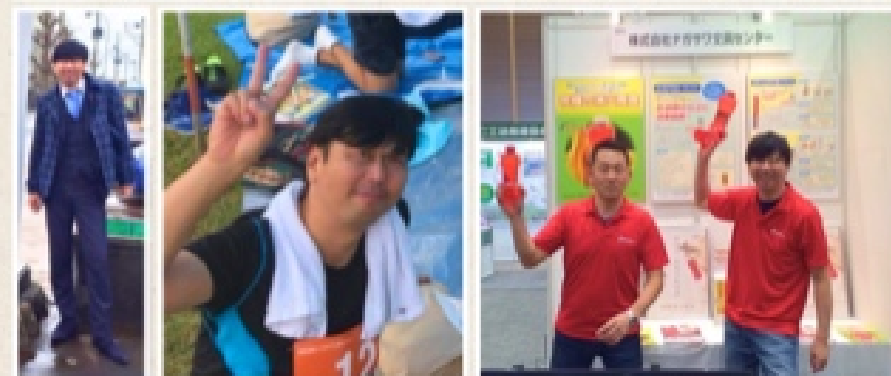
ここまでの旅は、常識の地図を片手に、違和感というコンパスを頼りに進んできた航海でした。けれど、この先にはもう、地図はありません。

僕は営業部長の役割を後進に手渡し、新しい島を探す準備をしています。でも実は、島というより「星」の方が正確です。僕の船はもはや「宇宙船」になりつつあります。その船が宇宙へ飛び立つには発射台の建設はもちろん、社内との繋がりという見えない何かが必要です。

これまでの航海で得た違和感、問い、信念—それらを燃料にして今度は“視座”を変え“重力そのもの”の意味を再定義する旅へと向かおうとしています。

それは決して別の可能性へ賭けるものではありません。常識の外へ飛び出しっぱなしが良いということでもありません。老舗・伝統の会社が持つ最大のアセット「信頼」を活かし切る試みです。

だから僕は、日々の営みの中にある「当たり前」にこそ問いを投げかけ、組織と社会の境界で“宇宙”から自分と会社を観測する。そう決意をしました。

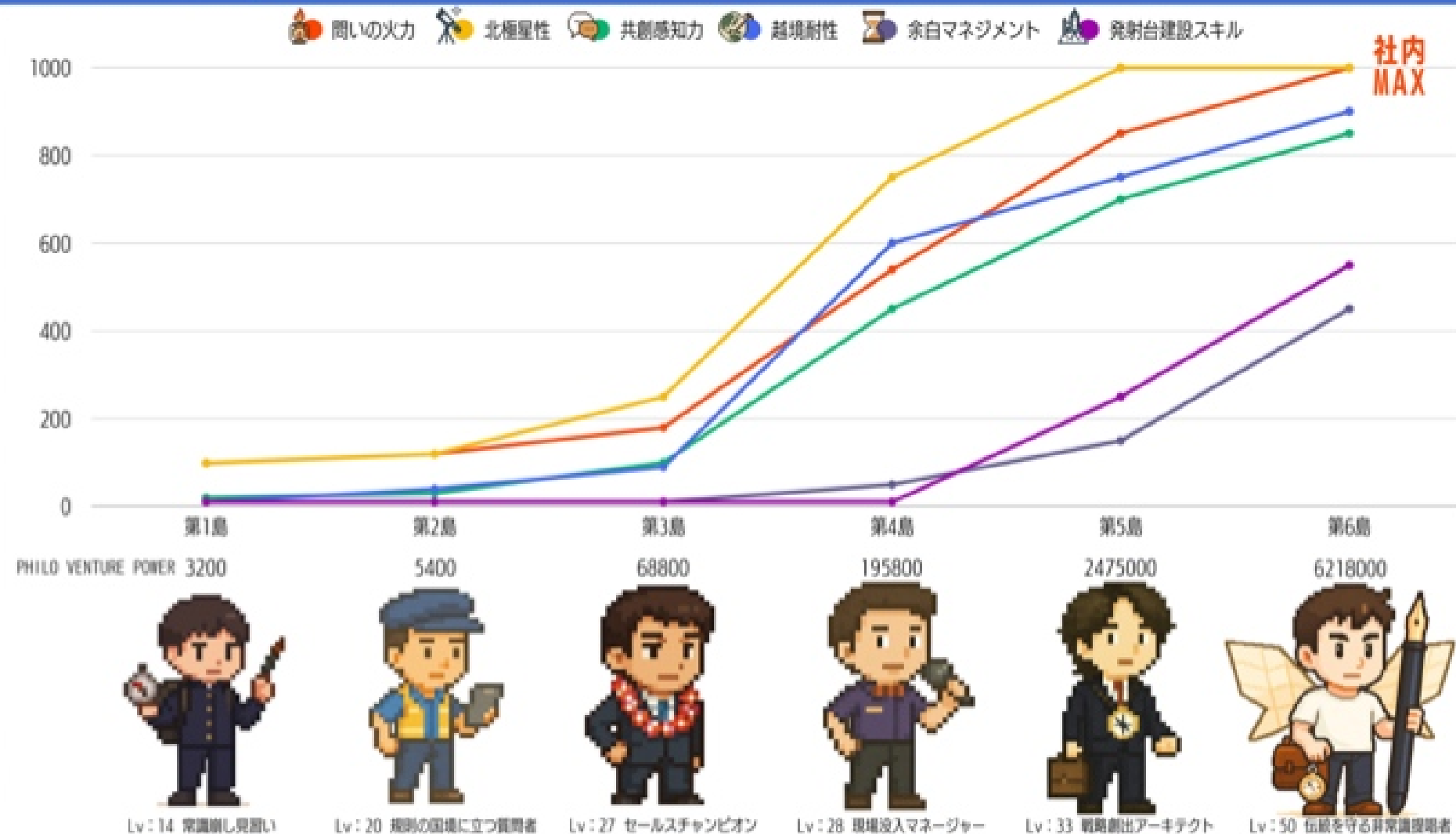


組織の“当たり前” を問い直す24の視点

問いが止まらぬ者だけが、境界を越えてゆく
その違和感こそ、キャリアのコンパスだ

No	用語・語録	意味・背景・解説	No	用語・語録	意味・背景・解説
1	ファーストペンギン	誰よりも先に飛び込む存在。リスクを取って挑戦する者	13	やらされる仕事と、やる仕事	与えられることと自ら挑むことの違いへの感受性
2	常識は多数派の正義	社会の「当たり前」は相対的で、時代や文脈で変わるという気づき	14	看板に自分を預けない	組織名や役職で評価されず、自分自身の価値で勝負する意思
3	3回ルール	3回理由を聞いても答えのない根拠なき規則は不要という行動原則	15	Tシャツはスーツ	職場環境・文化ごとの「同一人物でも求められる変容」を象徴
4	線が1本の阿弥陀くじ	可能性や選択肢が一つしかないように錯覚する構造 またはその考えに囚われる人や組織の思考プロセス	16	越境人材	多職種・多領域を渡り歩くキャリアの複層性の体現者
5	素直な無知	無知を恥じるのではなく、「なんで？」と問える姿勢を導く感性	17	置かれた場所で無理に叫かない	環境に無理に順応せず、自ら動いて環境を変えることの選択
6	違和感を羅針盤に	違和感を感じたときこそ進む方向を考える起点とする哲学	18	名前だけがない仕事	価値はあるのに評価されない職務と誇りが入り混じる領域の仕事
7	制服という記号	記号的同一性（画一化）への違和感の象徴	19	スタンダードの再定義	“常識”や“善く”という概念を 自らのやり方で更新しようとする姿勢
8	働くことの外にある正義	会社の内の評価軸と、自分の信じる正義の乖離を捉え直す力	20	初期衝動の棚卸し	自分がなぜこの道を選んでいるかを振り返る原点探しの営み
9	味がしないものを 食べ続けるな	意味のない作業や刺激のない日々を繰り返すことへの警鐘	21	「なんで？」を守る	問う力を失わない、思考と行動の根源としての疑問
10	自分の正義を疑う	他人に問われたとき、自分の正義は本当に正しいのか？と省みる視点	22	違和感の感覚	微細な違和感を捉え、無視せず行動に変える能力
11	義務教育への違和感	与えられた教育が「問いの自由」や「納得」を奪っていないかという感触	23	自分が選んだ道であるという自覚	外部の価値観に左右されず、納得して進む覚悟
12	境界線を越える	社会的・文化的な「内と外」を行き来する越境的態度	24	非常道航路／越境航路	王道から外れて、自分の感覚に従って進むルート

第1部 | りょじのステータス変遷



NEXT: 宇宙が待っている ▶

第2部 | 視座編 “越境” は宇宙遊泳

自他を観測する“無重力の宇宙”という視座

第1部では
僕が“違和感”をコンパスに越境してきた物語をお届けしてきました。

ただ、今から語る第2部は
“どこへ行くか”ではなく“どう在るか”の話です。

僕は今、会社という島に所属しながら宇宙を漂っています。
越境とは「出る」ことではなく
“内と繋がりを保ち、外へ拡張していくこと”なのかもしれません。

すべてが「選び取ってきた軌道」で構成されている今。
僕は、まだ名前のない星座を描くように、
誰かの越境の励ましにもなれたらと思います。

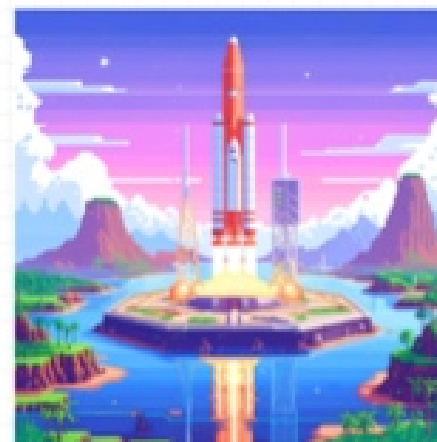
では、いきましょう。視座という“無重力の宇宙”へ。

宇宙航行の相棒 ▶ Philoventure for universe

- 主推進装置：社内で培った信頼と観測知
- 通信システム：共創プロトコル
- 主な航路：社内 ↔ 社外 ↔ 社会全体
- 船長：神納 亮二（越境思想家 問いの錬金術師）
- 航行上の注意：航行中は重力（常識）や
時空（社会制度）による干渉を受ける場合あり。
万年筆で軌道修正可。
- 今後の拡張：他の越境者との合流で
ドッキング可能。思想ネットワーク構築
に向けたシナプス航路図も開発予定。



第1星 | 信用の発射台 そして宇宙を目指す僕 P24-P25



- 内にある宝を外へ解き放つ
- 発射台は内側に繋がれた
- このコミュニティ、ええなあ
- 全ては僕なりの貢献意識

第2星 | ペンギンの星 共創による惑星探索 P26-P27



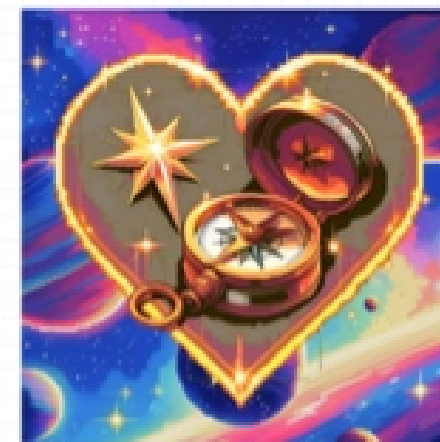
- まだまだ200、星は無限にある
- ギクシャクは“地めに”手立てを打つ
- 「何のために」から始める共創
- イカリつきの共創航路



Philoventure for universe 推奨搭乗者 | 1. 常識の重力から離脱しつつある人 2. 問いを持ち、まだ言葉になっていない人 3. 社会とつながりながらも個を忘れない人

船名	Philoventure for universe	船体分類	哲学級多次元航行船	航行原理	メタ認知推進式 思想エンジン搭載
航行目的	宇宙＝共創空間を航行し、常識と前提を超えて 共創の問いを発掘・観測・育成する哲学的探査	主要航路	宇宙空間に浮かぶ思想惑星群、問いのブラックホール、 共創リング、常識圏外の微小星雲など	動力源	内的違和感エネルギーと共鳴信頼システム
装備	万年筆レーザー（問いの投射兵器）/ 言語化デバイス/共創フィールド生成装置	副装備	哲学対話デバイス/違和感増幅フィルター/ しがらみ脱出ポッド	積載物	神納語録、未言語化アイデア、共創者リスト、 誓約書、夢の残骸と再構築キット

第3星 | 内なる北極星 ぶれない観測者 P26-P27



- まだ行ける、が僕の燃料
- 主導権は“時間”じゃなく“自分”
- 「ブレない」正体は“選び続ける”こと
- 変に思われるほどマクロな視野と視座

第4星 | あなたの星 常識を更新する力 P28-P29



- 可能性は常に開かれている
- 静かに届く“越境土産”
- 常識を脱ぐ、カウンターアクション
- 僕は宇宙エレベーターを作り続ける

いつだって主人公は自分、犯人も自分。
常に選択肢は自分にあるのだから。

人の意見に否定もしないし
肯定もしないし後悔もしない。

あるのは目の前にある現実という
自分の鏡としっかり向き合い
受け入れることだ。



第1星 | 信用の発射台
そして宇宙を目指す僕

内にある宝を外へ解き放つ

140年の重みを未来の共創へ転換する
老舗の信頼を「信用通貨」に変える発想

法人営業本部長である自分が、なぜ「新規事業開発」という未知の分野に挑もうとしたのか。背景に「文具」という領域が時代とともに変質してきた課題意識がありました。この会社の大きな器こそ時代を突破する「共創力」に活用できるはずという想いが日々募っていました。

その鍵は「創業140年の信頼（当時）」というアセットの再定義。これは単なる実績ではなく社外においても通用する「共創の信用通貨」になり得る。そう考えたとき、社内だけに留まっていたはいけない、という確信と会社への新たな貢献という使命感が生まれました。



発射台は内側に築かれた

社内を離れず、社外に出る
越境には、背中を預けられる人が要る

越境したいという思いは、実はかなり前から芽生えていました。ただ組織の中核を担う立場として、すぐ“外へ出る”ことは難しくタイミングを見極めていました。社長に「新規事業開発」への越境を直訴したのは、部下の育成とチーム体制の土台が整ったと感じたからです。

このときの決断は「社内にながら、社外に拠点を持つ」という矛盾を抱えた挑戦でした。これは「一度社内を離れて戻る」という単純な往復ではなく、社内と社外を同時に生きる“多重所属”という新しい働き方の実践と組織のカルチャーそのものを変える第一歩でした。

このコミュニティ、ええなあ

アンカー神戸という宇宙ステーション
“知らない”を味わう越境の宙（そら）

そんな折に出会ったのが「アンカー神戸」です。社長から「ちょっと行ってきて」と言われ足を運んだのが最初のきっかけですが「これは自分が求めていた味や」と直感。アンカー神戸に集う企業は、食べたことのない料理のような新鮮な刺激がありました。テーマが多様で正解がない世界。“知らない”ことを楽しむ空間に出会い、迷いはありませんでした。

「自分がいなくても回る組織」を育てたことで、今度は「自分にしかできない動き」に集中できる環境に身を置くことになりました。

全ては僕なりの貢献意識

“社内での関係性”こそが重力を解き放つ
組織の信用通貨で描く“共創航路”の出発点

日本の常識では「退職することでしか次の越境先を目指せない」と思っていたかつての僕。けれど内に築いた信頼を武器とすれば、外での越境は可能になる——その感覚をアンカー神戸での活動を通して実感しはじめています。

外へ飛び出すには、離れる覚悟ではなく「背中を預けられる誰か」の存在が必要でした。そして、自分が長年積み重ねてきた「社内での関係性への投資」こそが、今の活動の発射台になっている。これは、仕事のスキルやアイデアだけでは代替できないものです。

「創業140年の信頼」を“信用通貨”に変えるという発想は、組織に培われた時間と文化を、未来と他者のために流通させるということ。うちだからこそその強みです。

“越境”とは単に別の場所に行くことではありません。越境の前提には「内側のアセットを外と共有する」という意思があり、それは“交換”ではなく“拡張”です。

社内に居続けることも、社外に出ることも、どちらも重要です。相互の意味と実務を往復し、自分はその接点に立ち続け“文化を拡張する存在”になってきました。

共創の旅の燃料は、日々誰とどんな時間を積み重ねてきたかに尽きます。自分が選んだ“多重所属”という働き方は、越境のための仮想宇宙ステーションのようなもの。

アンカー神戸を目指して飛び立つ僕は、まだ地球に近い低軌道。けれど、この先に得る重力からの解放こそ、無限の宇宙を航行する宇宙飛行士としての僕の始まりです。

りょじ Lv: 51 越境ロケットエンジニア | 信頼基盤の設計士



PHILO VENTURE POWER: 哲学冒險力

010055000
+3837000

自らの実績・信頼・共創への使命感をもとに、“信用”を推進力とする発射台を構築。数年にわたる宇宙航行への意志が、万難を廃し、打ち上げ準備へと転じた。ゼロイチの旅が今、始まる……。



そうび

署名済ロケット起案書
共創に向けた誓いを書き記す筆先。信用が燃料

着火待機スーツ
変革と共創の準備を怠らない実務者の正装

アンカー設計図ケース
神戸から宇宙へ。拠点（Anchor）から全てが始まる

“発射角”センサー
信用・共鳴・違和感を読み取り、発射角度を見極める

かくとくしょうごう

信頼推進士
人と組織をつなぐ信用のエンジニア

発射台設計士
越境のロケットに火をつける現場拠点の起点者

組織とあなたの関係性こそ、飛び立つための土台であり
社内で築いた信頼こそ、“外”を目指す燃料、と僕は思います

あなたの“発射台”は築かれていますか
その発射台は、どこに向かって伸びていますか



第2星 | ペンギンの星
共創による惑星探索“常識”の引力を脱し
未開の航路を進む
ファーストペンギン“宇宙ステーション”アンカー神戸から
未開の星々を目指す、宇宙船内模様

まだまだ200、星は無限にある

地球の資源があるからこそ
ゼロイチの宇宙遊泳に飛び出せる

アンカー神戸という“宇宙ステーション”での活動が始まり、僕は約200の新規事業を構想、そのうち135を進行させ、完全なゼロイチでマネタイズに至ったのは9つ——それが今の到達点です。僕を認知している起業家はとても多く、商談というより“共鳴”を重ねてきました。

スタートアップのニーズを汲みつつ、僕たちが持つ営業力・信用力・つながりの橋を架ける。まるで、地球の資源を積んだシャトルで、まだ見ぬ惑星へ向かう感覚です。熱量の違いや予測不能な展開にも直面しますが「自分だからこそ担える宇宙遊泳の役割」があると感じています。



ギクシャクは“始めに”手立てを打つ

“限界値と期待”のすり合わせという重力調整
共創の宇宙船をただの漂流物にしないため

共創で一番大切なのは最初の“温度感のずれ”を認知しあうこと。スタートアップは自らの命運をかけ一本の刀を研ぎ澄ます。一方、老舗の僕たちは千本あるうちの一本の刀として共創する。ここには、時間の流れも、かけられる熱量も違いがあります。期待値の食い違いで「営業マンを毎日専任でつけて」と言われたことも。

けれど、その度に限界値をすり合わせ“あきらめ”ではない“合意点”を探す。それは、引力を調整してドッキングするような作業です。数字の支配ではなく、目的を分かち合う意志による共創です。

「何のために」から始める共創

数字の前に、熱があり
関係性の深度が、成果を運ぶ

「売上はいくらを目指して」「何件契約とって」数字が主流になる気持ち、よく分かります。けれど僕は「数字だけで繋がる関係はつまらない」とも思います。大切なのは「この事業をなぜやるか」「想いは誰に届いてほしいのか」数字の裏側にある熱量です。数字は“関係性の副産物”として生まれる。そう信じて動いています。

お互いに関係性を深めていくと、やがて弊社の既存事業の受注を受けるときもあります。——実際にアンカー神戸でのご縁からの受注の形で社内貢献しています。

イカリつきの共創航路

“会社へ居ながら越境する”ことは
まるで宇宙エレベーター

会社の外へ越境するということは、別の星へ移住することではありません。僕にとっての“越境”は地球に軌道を描くように内と外を行き来しながら動き続けることです。僕の共創相手が既存事業の新規取引先として社内と関わるようになっていきます。その繋がりです社内も間接的に僕の動きを感じているようです。それはまるで、重みを感じないイカリを地上に降ろし宇宙遊泳しているようなもの。

ファーストペンギンである僕の“イカリつき共創航路”は未開の星を目指すと同時に、会社の外と内を繋ぐ、宇宙エレベーターの機能も備わっているようです。だからこそ会社へ新規事業でも既存事業でも貢献できます。

でも、そのイカリが地上に届くかどうかは、社内で積み上げてきた信頼、放置プレイとも呼べる絶妙な距離感、そして、他者を信じて任せられる覚悟が必要です。信頼を前提とした「多重所属」の在り方が、これからの日本の働き方をアップデートしていく気がしています。

僕の航海は、既に地球の重力を抜け始めています。でもこれは行って帰って来れない航海ではありません。一つのところに所属し、その枠の中で仕事をする“常識”という重力から“解き放たれる”ことで、重力の意味を再定義しているのです。

“非常識を常識に変える”とは、ただ枠からはみ出しを目的としているわけではなく、無重力というしびれや先入観のない状態で世界を観察すること。観察の結果、その先に誰も見たことのない星があるかもしれない——そんな想いで、僕は今日も宇宙を泳いでいます。

りょじ Lv: 52 共創探査士 / 非常識トレイルブレイザー



PHILO VENTURE POWER: 哲学習得力

077798000
+67743000宇宙ステーションAnchor
から社内にイカリを降ろし
“共創”船外活動。未知
の知見・物資を社内へ還
元する宇宙エレベーター
も建設に着手。常識とい
う重力から離脱し、ペン
ギン達と惑星探索実施。

7000 未知惑星エンジン: 探究・動 MAX +4000
5000 真実定位センサー: 観察・静 MAX +3000
5000 共創認知力: 対話・共鳴 MAX +5001
7000 異界航行スキル: 異文化対応力 +7099
999 全自マネジメント: 信頼・静寂 +249
8000 臨界突破ガイド: 他者支援・協定 MAX +2000

そうび

共創航路マーカー
共創の軌跡を焼き出し、アイデアを現実に変える
ペンギン流星スーツ
先達陣にのみ着用に許される伝説のスーツ
宇宙エレベータードッキングバック
社内と社外を行き来するための物理的接続部
“重力遮断”音波
常識に囚われない音波を発生し、内外的興味が発見される

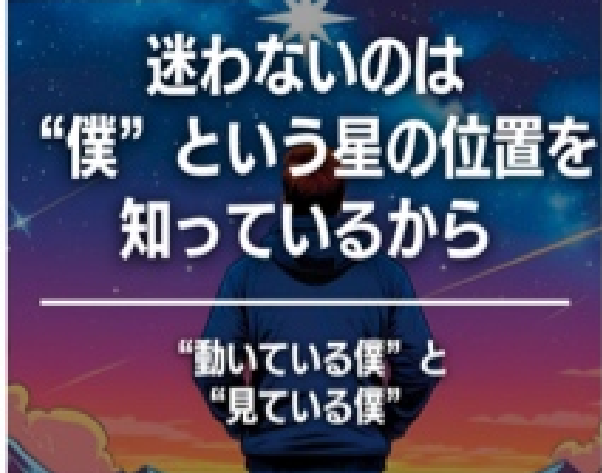
かくとくしょうごう

浮遊探査士
常識圏外で動く
宇宙泳法の実践者
共創機関士
他社・他者と軌道を接続する
軌道エンジン整備士

無言で信じ合える“背中合わせの関係”があれば
「内か外か」で考える時代は、そろそろ終わるのかもしれない。

あなたは今、どんな重力に縛られていますか？
いつ、どのように“離陸”したいですか？



第3星 | 内なる北極星
ぶれない観測者

まだ行ける、が僕の燃料

「本気を出した」とは自分で言わない
それが僕の矜持

多くの人が「全力でやった」と言うとき、それは往々にして「自分比」に過ぎません。僕にとっての「本気」とは、自分の中の余白を明確に意識したうえで「まだ行ける」と思える状態を保ち続けること。だからこそ自分から「やりきった」とは決して言わない。あくまで他者がそう見てくれたときにだけ成立する評価だからです。

余白を持つという生き方は「まだ何かできる」と信じる力であり「やりきった」と自分で定義してしまうことで広がりやを失うことへの本能的な回避でもあります。僕のポリシーとも言えますね。



主導権は“時間”じゃなく“自分”

「全然忙しくないです」って笑える強さ
時間を観測する人が、時間を超えられる

「忙しいですね」とよく言われます。けれど僕は「全然ですよ」とよく笑って返します。つまり、余白の有無は物理的な時間ではなく「意志」で決まる。時間の主導権を自分で持っているかどうか——この違いは、現代の働き方の根底を大きく揺さぶる示唆に繋がっています。

本当に大事なことは「空白の中にある」と感じていて何も無い時間にも価値を感じています。余白があることで、次に動く方向も見えてくるし、人との関係にもゆとりが生まれます。だから定期的に時間に振り回されていないか、自分を観測するようにしています。

「ブレない」正体は“選び続ける”こと

納得できる選択だけが、自分を裏切らない
誰かの正解より、自分の判断を信じる力

「神納さんは本当にブレないですね」と言われます。それは「選ばない」ではなく「選び続ける」覚悟。マクドナルドの新商品無料券を持っていたり、ビッグマックを注文してしまいます。マクドナルドに行くのではなくビッグマックを食べに行くことと決めているからです。「自分が納得できる選択」を続けています。たまに迷回りますが構いません。他人の軸では測れない自分の“納得基準”があるから。誰に勧められても、行きたくなければ行かない。食べたくなければ食べない。一貫した意思決定の軸は「自分を裏切らない」という信念です。

変に思われるほどマクロな視野と視座

人の考えや行動に“ホモサピエンスを観察”
している感覚のある僕、ちょっと変なやつかも

自分は「北極星」に似ているかもしれません。自分自身を動かしながらも、どこかに“動かない自分”がいて、常にそれを基準に周囲を俯瞰し、また、自分も俯瞰して見えています。だから、慌てない。惑わない。

でもそれは、意思の力で踏ん張っているわけではありません。僕にとって世界は、常に「人ってなぜこう動くんやろ?」「この構造の背景に何があるんやろ?」という視点で見ている。まるで文化人類学者が異文化を観察するように、あらゆるものをひとつ外側から捉えている感覚があるんです。だから、目の前の出来事に一言一憂するよりも、それを“現象”としてとらえている自分がいます。誰かの熱量や空気感には共鳴もするし、良いなと思った人と一緒に過ごしたい。けれど、依存することではなく、感情に流されてしまうこともない、根っからの観察者ですね。ここまで言っちゃうと自分でも変なやつかもって思います。

余白を意識し、時間を俯瞰し、自分の“納得基準”を信じて選び続ける——その姿勢は、誰かに影響されずとも、他者と心地よい関係を築いていく土台となります。

その生きていくスタンス・人との関わりは内向きであるように見えて、実は外へ開かれています。観察者であり、実行者でもある僕は、どこか常に“ひとつ外側”から世界を眺めている。それが、揺れない理由であり、社内と社外を越境し、会社と社会の接続を可能にする「視座」そのものかもしれません。

りょじ Lv: 53 境界ナビゲーター | 自己重力制御士



越境とは外に出るだけでなく内を深く知ること。境界を漂う中ブレない“自分という星”の位置を見極め、自己と他者の座標を結び直す。それはかつて北極星を道標にしていた船乗りのように。

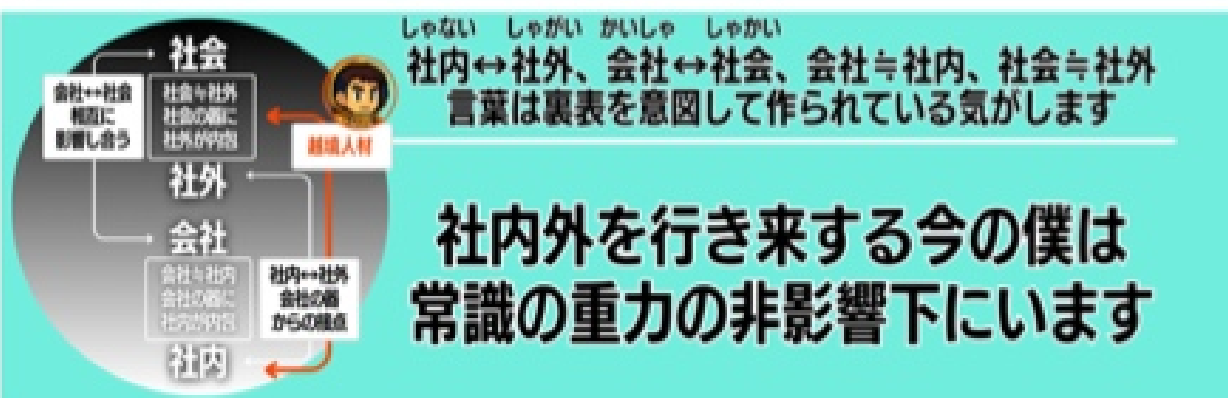
そうび

すり合わせMIXペン
境界線の融合・採択を可能にする、まるで魔法のペン
境界探査摩擦防止スーツ
内と外、組織と社会の摩擦を極力排した観測服
永久エネルギー搭載バックパック
まだいける、と言葉を聞くとエネルギーが充填される
“内外統合”座標キャッチャー
内なる動機と外部刺激を重ね、座標空間を再構築

未知懸念エンジン: 探究・動 MAX+1000
真実定位センサー: 観察・静 MAX+4999
感覚共振シグナル: 対話・共鳴 MAX+1000
異界航行スキル: 異文化対応力 MAX+2999
余白創設デザイン: 傍聴・静寂 MAX+8001
臨界突破ガイド: 他者支援・導き MAX+1000

かくとくしょうごう

座標調整士
座標調整士
社内外の曖昧な境界を意味ある地図に変える
北極星守護官
北極星守護官
自分という指針を確ち続ける自律航行の翼



越境とは社会貢献であり
組織変革であり
個人の生き方でもあるあなたと“変革”を共謀しようか
“越境者”である僕ができること

可能性は常に開かれている

越境は“できるかどうか”ではなく
“やる”のは当然。“どうやるか”が本質

アンカー神戸での共創事業の提案は、基本すべて受けるようにしています。「できる・できない」は現時点のキャパシティでしかなく、可能性を閉じてしまう理由にはなりません。まず「やる」と決める。その上で「どうやるか」を考えればいいんです。これは過去の経験で培った「自責の構え」でもあり、未知との出会いから自分のキャパが大きくなくていく実感でもあります。

越境の醍醐味は業界・業種・視点の“多重化”による思考の立体化。会社の業務や収益のスケールも社内からだけでなく、社外からの目線で俯瞰できるようになりました。



静かに届く“越境土産”

社外で得た関係性という“目に見えない資産”
数値にできない成果が、じわじわ効いてくる

会社という組織で、僕のような越境人材が抱える一番の課題は「見えない仕事」の価値をどう伝えるか。たとえば商談のように明確な数字が出るわけではなく関係性の構築や信頼の醸成といった“時間の積算”です。その価値の伝播は、ある日突然「そういえば神納さんの紹介で仕事が入った」など予期せぬ形で現れます。この感覚は、実際に越境した人であるあるです。

だからこそ、“言葉より実績”。行動と成果によってじわじわと組織に送り込みます。越境人材から“宇宙エレベーター”を使った、越境土産です。

常識を脱ぐ、カウンターアクション

つまり、越境とは、
“常識を常識のままにしておかない”ための挑戦

僕が目指すのは「文具屋の営業」の常識を逸脱した、新しい営業スタイルの構築です。越境とは、新規事業の創造・共創であり、スタートアップ支援でもあり“組織文化を反転させる技法”だと思っています。

たとえば僕はスーツを着るのをやめました。それだけでも「老舗・文具屋」というバイアスを取り払う一歩。Webサイトを立ち上げ、文具感のない入口をつくる。これもまた“文具屋という認識”を反転させるための行動です。自分の振る舞い、提案、関わり方すべて「違和感」に向き合い「常識を更新する力」です。

だから僕は、今日も共創を断りません

発射台と宇宙エレベーターの建設者でありつつ
共創のロケットの乗組員でもある今の僕

アンカー神戸に行くと、多くの起業家が声をかけてくれます。その多様な関わりの中で僕は今、社内外に宇宙エレベーターを何基も建設していると言えます。

共創の場を通じて、僕自身も「自分の航路を進む」ことから「他者の打ち上げにも関与する」フェーズに入ってきた実感があります。“誰かの越境を支えること”は“自分の越境哲学を深めること”でもある。だから、僕は宇宙エレベーターを昇降するだけでなく、建設にも関わるようになったのだと思います。

そうやって接続された人と人、組織と社会のネットワークが“常識”という重力圏を越えていく“共創のロケット”になると信じています。そのロケットは誰か一人のものじゃない。関わるすべての人の熱と意志で、未来へ飛び立つ乗り物です。

だから僕は、今日もつながることを断りません。

自分と同じように「自分を観測できる越境人材」を会社にもっと増やしたい。受け身ではなく、環境を観察し行動で関係性を築く力。そんな人が社内に増えていけば会社も社会ももっと自由で、創造的な場所になるはずですよ。

不満ではなく、感謝で会社と関わる越境人材こそ、組織文化変革のキープレイヤーになる。その確信があるからこそ、僕は越境を続けます。

そして、その航路は誰にでも開かれていることを、実践しながら伝えていきたいのです。

りよじ Lv: 54 常識再編集者 | 創造的観察 & 創造的介入 = kamiclass21

PHILO VENTURE POWER: 哲学冒険力	未知発見エンジン: 探究・動	MAX + MAX = ∞
999998000	高精度位置センサー: 観察・静	MAX + MAX = ∞
+522200000	感覚共通シグナル: 対話・共鳴	MAX + MAX = ∞
	異界航行スキル: 異文化対応力	MAX + MAX = ∞
	余白創造デザイン: 傍聴・静観	MAX + MAX = ∞
	臨界突破ガイド: 他者支援・導き	MAX + MAX = ∞

そうび

未来の常識を創る黄金の万年筆
違和感から共感へ。社会を再定義する観察者の筆

未来の常識を創る虹色の翼
企業文化・個人哲学・社会課題を交換・接続する翼

未来の常識を創るバックパック
共創者たちの言葉と想いの物語を持ち運ぶ装置

未来の常識を創る電波
社会の違和感を新しい常識に変換する電波発生源

かくとくしょうごう

創造的
観察者

創造的観察者
新たな可能性の“種”を
見つける目を持つ者

創造的
介入者

創造的介入者
状況を動かし、
共創の渦を起こす実践者

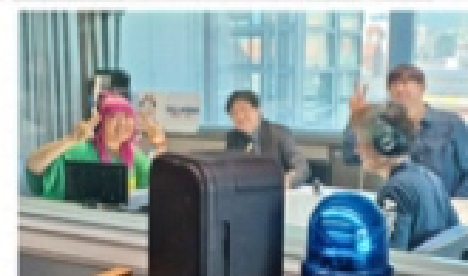
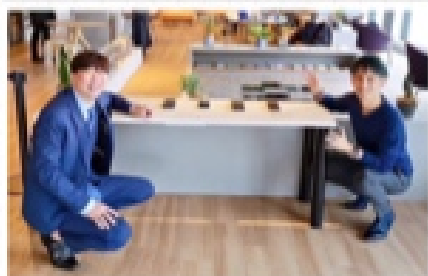
すべては、一人の違和感から始まる。
それが誰かの共感になり、組織の変化となり、やがて社会を越える。

僕の航路は、その証明であり、
その呼びかけでもある。



完 第2部 | 視座編 “越境” への確信

“越境”のその先に、なぜ僕は手を伸ばすのか——



その先にいる誰かへ——越境の理由を、もう一度問う。外に向かい続ける自分の原点は、内なる確信にあった。

共創によるアセットの掛け算の未来

他社との出会い、他社との繋がり、他社との共創を「物理的に社外で行う」ことが実は大切だと思うんです。それは、各々の会社の「常識という重力」から解放された状態だからこそ発揮できる「自由に現実を動かす掛け算」を可能にする意味もあるかもしれません。

組織の中にいると、いつのまにか自分が“その組織の論理”でしか考えられなくなっていることがあります。140年以上の歴史がある会社では尚のこと。社内から未開拓の領域を探することはとても難しいことです。それに気づいたとき、僕は社外に出る準備を始めました。

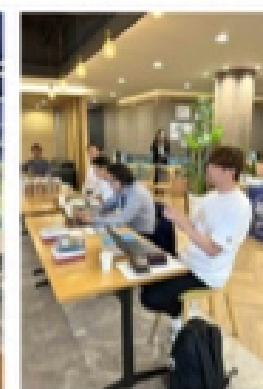
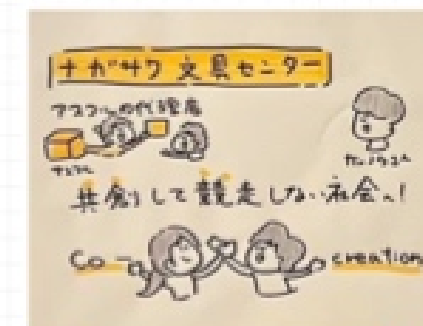
自社のイメージを文具以上に拡張させる新たな試み。営業、ではなく、新規事業開発。もっと言えば、越境・共創。そのためには、一度、その“重力圏”の外に出る必要があったんです

自社の歴史・信頼を活かした「未知なる共創」がもたらす、自社へ還元できる「自社イメージの拡張」と実際のマネタイズ。また、異業種との繋がりから生まれる既存事業へのオーダー。僕の越境はこうに多層的な影響を及ぼしています。

共創においては、それぞれが持つ会社のアセットと共に、誰が誰と共創するのかという個人のアセット（そのらしさ）も重要だと感じています。また、その個人同士が、互いの「らしさ」を最大限に発揮し、現実の掛け算を起こす「場」が必要です。僕にとってそれは「アンカー神戸」でした。

越境は「自社の常識」に気づいた瞬間に始まる、静かな革命のようなものです。その革命は、自社の前進であり拡張であり還元でもあります。だからこそ、僕は越境していく人たちがもっと増えてほしいと願います。僕が越境を続けるのは、その姿を示すためなんです。

“越境”のその先に、なぜ僕は手を伸ばすのか。その先に誰がいるのか。それはあなたに気づいて欲しいからです。静かな革命を、僕と一緒に起こしましょう。



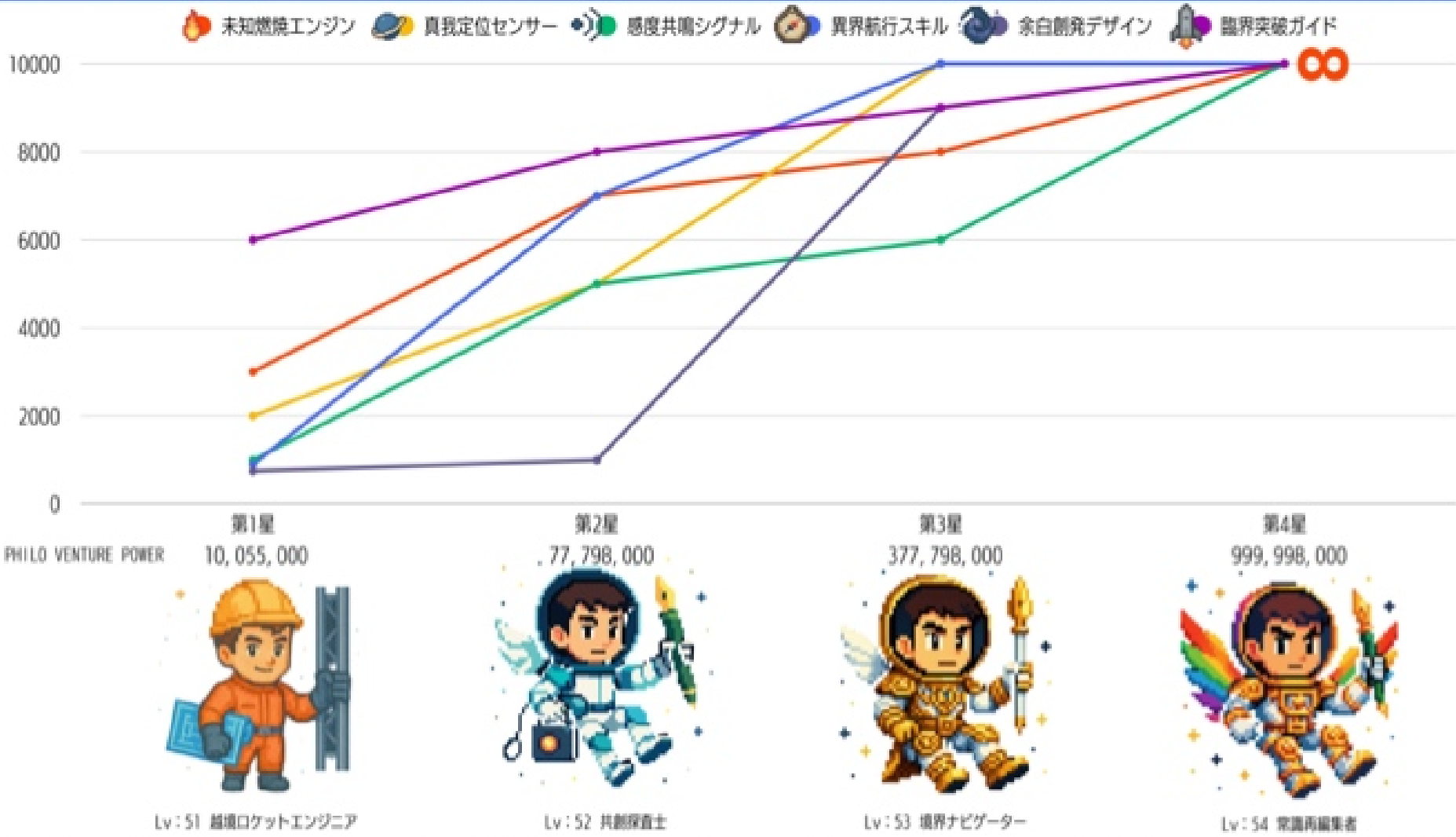
Be Next KOBEへ

宇宙的視座で “常識” を超える24の航路

“誰かの打ち上げに関わる” ことで
自分の越境哲学も深くなる

No	用語・語録	意味・背景・解説	No	用語・語録	意味・背景・解説
1	信用の発射台	社内外の信頼をベースに越境行動を起こす準備段階	13	組織を超える越境人材	自分の居場所を再定義し社会との新しい接続を生み出す
2	アンカー神戸	自身の思想と行動の“発射拠点”となった共創の場	14	常識は“再定義される前提”	思考停止を打破するための低価値観の根底
3	宇宙エレベーター	組織に所属しながら社会と接続する装置。共創の比喩に多用	15	違和感は更新の前兆	現場で湧く違和感こそが変革のタネ
4	ファーストペンギン	未知の領域へ最初に飛び込む越境者の象徴	16	共感から文化が変わる	個の違和感→他者共感→組織変化→社会影響の連鎖構造
5	あわい（淡い）	組織と社会が交わる境界	17	僕の航路は呼びかけ	生き様そのものが誰かの越境の目覚めになる
6	常識の重力圏	社会や組織に根付いた思考の“引力”	18	境界ナビゲーター	複数領域をつなぎ案内する者。自己役割の象徴的表現
7	共創ロケット	複数人でつくる意思と熱量の乗り物。新常識を生む推進力	19	自己重力制御士	他人軸でぶれず、自分軸で在り続ける技術
8	他者の打ち上げに関与	自分の越境に加え、他者の挑戦を後押しするフェーズ	20	宇宙的観測視点	メタ視座。地球単位でなく宇宙単位で見る思考スケール
9	“誰かの越境”は“自分の哲学”を深めること	他者支援と自己内省が重なる感覚	21	臨界突破ガイド	越境の背中を押す存在。限界点を越えさせる装置や人物の比喩。
10	境界が溶ける	社内外・公私・職種の分断が意味を失いはじめる	22	感度共鳴シグナル	共創のセンサー。反応し合う感性のネットワーク
11	僕という星の位置	内なる北極星。自分の立ち位置と方向を見失わない感覚	23	未知燃焼エンジン	自分の中にある“なぜか動きたくなる”原動力の比喩
12	名付による存在証明	見えない価値を定義し、言語化する力	24	真我定位センサー	“ほんとうの自分”の位置を捉えるための内なる羅針盤

第2部 | りょじのステータス変遷



今日が地球最後の日だったとしても おもしろい人生やったな。そんな実感と共に在る自分

さて、ここまでは
「社内と社外を越境する、敬愛すべきファーストペンギン」の方々へ向けて
僕の“視野”と“視座”の旅にお付き合いいただきました。

けれど僕の旅には、
その“視野”と“視座”の狭間にもう一つ
“語らずの航路”があります。

それは僕の基準で唯一、
全力の限りを尽くし、余白を埋めた時期。
父・母・仕事と向き合う2年間。

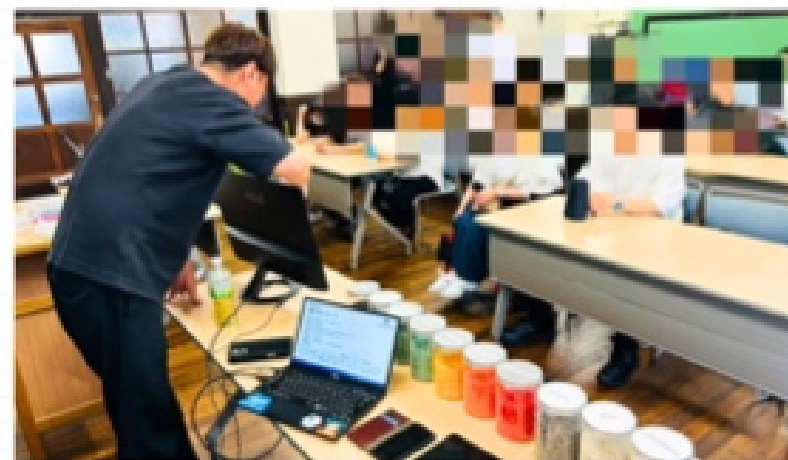
今も昔も、僕という北極星はブレない。

けれど、何を携えて自分は存在したいのか。
そんな自分が、今実感しているささやかな感覚について、
次のページでお話しさせていただきます。

——“余白のない全力”を越えた“ファーストペンギン”の宇宙遊泳の先。

味がするものを食べて生きていきたいと願い、
おもしろい人生やったな、と実感しながら、人生を終えたい僕。

もし今日が
そんな“おもしろい人生”の最後だったとしても、
どう過ごすかの準備はもうできています——



“余白の向こう側”

僕自身を究極的に俯瞰すれば、人生に意味なんて求めていません。でも、今、この瞬間を、僕の大切な人と一緒に過ごさせていれば、たとえ今日が地球最後の日でも僕は幸せだし“おもしろい人生”なんだと思います。両親が、僕に、そう気づかせてくれました。

父が余命宣告を受け、同時に母が認知症となり、両親の生活をサポートする役割を一人で担いながら、仕事でも結果を出し続ける必要があった、あの2年間。人生で唯一、本当の意味で全力を出し切った期間でした。そこには、どこを探しても余白なんてありませんでした。

けれど、だからこそ見えたこともあります。人って普段は「ベストを尽くした」と言っても、実はまだ余力を残してるんですね。あのとき、初めて自分の限界を体験したからこそ“余白の向こう側”を意識するようになりました。それは、その余白を自分の大切な人のために使いたい、という境地です。

父が亡くなる前、母との関係や僕たちのことをぼつぼつと話してくれたんです。威厳のあった父が、徐々に元気がなくなる過程に寂しさもありましたが、同時に、父自身が他者（僕）との境界が緩んだことで、僕はそれまで知らなかった“父という人間”の実像を、やっと知れた気がしました。それは介護という密接な時間があつたからこそ得られたもの。僕は、この二人から生まれて、育ててもらって、本当に幸せだと感じました。帰省して顔を合わす普段の交流では届かない、深い時間と関わり。人が生きてるって、そういうことかもしれません。

そして今、母の記憶が少しずつ消えていくのを、僕はそばで見えています。そのたびにふと思うんです。母にとって“記憶は人生でいちばん大切なもの”かもしれない。人が死ぬときに、手元に残るのは記憶だけ。忘れたくないもののなのに、忘れていく。それって、とても辛いだろうなって。

現時点の僕にとって、いちばん大切なものは何だろう。それは両親が教えてくれました。人との関わりというあたたかな感触のある記憶を持ち、今、この瞬間を、大切な人と過ごしていること——。そんなシンプルな生き方です。



本書は、あなたへの“問い”でもある

越境人材として、経営者として“これから”を見据えるあなたへ

この本は、一人のビジネスパーソンの人生を記録したものに見えるかもしれませんが、でも実際は、“あなた自身の問いを深め、あなたのコンパス”になることを願って編まれた一冊です。

組織を越え、肩書を越え、時に業界すら越えて動き始めた人たちへ。
僕たちはいま、答えのある「既存の成功モデル」ではなく
組織を越境しないと生まれない「共創による新規事業」によって
価値を生み出すフェーズに入っています。

本書に綴られた体験や思想は、あくまで僕個人の旅の記録ですが、

- ・共創における葛藤や突破口
- ・社内外の関係性デザインの実践例
- ・“記憶”を資本とする人生戦略の構築

などは、これからの企業経営や組織づくりにおいて再現性のあるヒントになるはずです。

また、共に働く仲間や部下との対話の素材としても活用できます。

たとえば「あなたにとって“おもしろい人生”とは？」という問いを投げかけてみるだけで、その人の価値観やエネルギーの源泉が、意外なほど鮮明に浮かび上がってきます。

「自分を物語ること」には、想像以上のパワーがあります。
言語化は、自己認識を変え、組織文化すら動かす。
本書が、その第一歩になれば嬉しいです。



あなたもまた、誰かの常識の枠を見直す・拡張する・価値を創出する
“越境のモデル”になりうる存在です。

そしてその旅は、語られ、共有されたときに、はじめて社会的意味を持ちます。

もしあなたが、自らの違和感と向き合い、問いを握り下げる旅を始めたとしたら——
そのとき、本書は、ひとつの羅針盤として役目を果たせたと言えるでしょう。

越境の旅は、いつでも、どこからでも始められる。
この本との出会いが、あなたの次の出発点であることを願って。





いつだって主人公は自分、犯人も自分。
常に選択肢は自分にあるのだから。

人の意見に否定もしないし
肯定もしないし迷いもしない。

あるのは目の前にある現実という
自分の鏡としっかり向き合い
受け入れることだ。

次のファーストペンギンは、あなたかもしれない。
そしてその時、僕の記憶もまた、
あなたの背中を押す風になることを願っています。

神納 亮二